

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ビワ *Eriobotrya japonica* (Thunb.) Lindl. (バラ科 Rosaceae)

木枯らしが吹き、木の葉舞う師走を迎える頃、里山を歩いていると、この時期には珍しく青々とした葉をつけ、花が咲いている高さ5～6mの木を見かけます。これは、初夏、オレンジ色の実をつけるビワ（枇杷）です。ビワの原産地は中国南西部とされていますが、日本の古書にビワの記載があり、大分県、山口県、福井県には野生のものが確認されていることから、自生かどうかはハッキリしないものの古くから日本にあったと考えられます。現在、多くは果樹として栽培されていますが、たまに野生化して里山に生えている場合があります。本植物は高さ10mほどにもなる常緑高木で、『大葉王樹』といわれ、薬木であることを示しています。葉は互生、長さ15～30cm、葉柄は短く、濃い緑色をした倒卵形または楕円形で縁に粗い鋸歯があり、表面はつやがありますが、裏面は褐色の綿毛が密生しています。枝葉は春・夏・秋と年に3度伸長し、花は冬（11～翌年1月）、枝先にやや黄色味を帯びた白い5弁の小花を咲かせます。花はあまり目立ちませんが、かぐわしい香りを持っています。5～6月頃、大きな葉の陰に楽器の琵琶のような形をした一口大の多くの甘い実がなり、黄橙色に熟し、その中に1～2個の大きな種を持ちます。果実は花托が肥厚した偽果で、全体が薄い産毛に覆われています。長崎県、千葉県、鹿児島県などの温暖な地域での栽培が多く、果実は糖とやクエン酸のほかにビタミンAに富んでいます。ビワは昔から、大きな種子のあるのが、難物でしたが、2006年、種なしびわである「希房」が品種登録されました。



写真1 ビワ (花)



写真2 ビワ (果実)



写真3 ビワヨウ (枇杷葉)

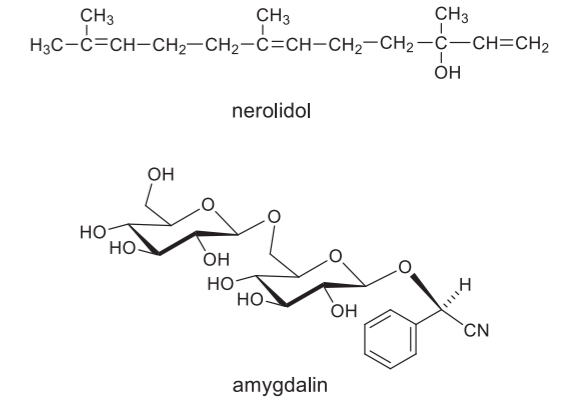


図1 成分 (nerolidol, amygdalin) の構造式

葉を乾かしたものは生薬ビワヨウ（枇杷葉, *Eriobotryae Folium*）として第17改正日本薬局方に収載されており、漢方では鼻および咽頭部の炎症を鎮め、鎮咳、去痰、鼻炎、鼻閉塞を治すとして辛夷清肺湯などに配剤されています。また、民間では打ち身や捻挫（ねんざ）に効果があり、風呂に入れると汗疹（あせも）に効き、皮膚を滑らかにするといわれています。葉の成分は nerolidol, amygdalin, クエン酸などで、ビワ茶として飲む他、直接、患部に貼ったり、葉の上にお灸を乗せる（温圧療法）とアミグダリンの鎮痛作用により神経痛に効果があるとされています。果実は食用としても親しまれ、咳、嘔吐、喉の渇きなどに良く、果実酒にも使われたりします。種子のみを使ったビワ種酒は、杏仁に共通する芳香を持ち、通の間で好まれています。材は硬く弾力性があり、木質も美しいので、昔から装飾品や杖として利用され、現在でも上記の薬用効果にあやかり、乾燥させて磨き縁起物の『長寿杖』と称して利用されています。また、激しく打ち合わせても折れることがないことから、剣道・剣術用の高級木刀として利用されています。